礼拝説教（子ども祝福式 2026 年 11 月８日）

説教者：中村信哉

少年イエス

ルカの福音書２章 41-52 節

はじめに

先ほど、「子ども祝福式」を行いましたので、今日は「子ども」に関する聖書箇所から学びたいと思って、この箇所を選びました。この箇所は、イエス様の少年時代が書かれている唯一の聖書箇所です。

1. イエスの両親

イエス様の両親は、「ヨセフ」と「マリア」です。しかしご存知のようにイエス様は、処女マリアから聖霊によってお生まれになりました。その意味では、「マリア」は確かに「イエス様の母」ですが、「ヨセフ」は厳密な意味では「イエス様の父」とは呼べないのかもしれません。しかしヨセフは、イエス様にとって「育ての親」であることは確かです。その意味で、イエス様は**「ヨセフの子」（ルカ 3:23、ヨハネ 6:42）**と呼ばれていました。

イエス様の両親であるヨセフとマリアは、神様の律法を守る敬虔な人たちでした。今日の聖書箇所の直前の 39 節にも、**「両親は、主の律法にしたがってすべてのことを成し遂げた」**とある通りです。今日の聖書箇所でも、**「イエスの両親は、過越の祭りに毎年エルサレムに行っていた」**とあります。旧約聖書の律法では、成人した男性は、年に三回、「過越の祭り」「七週の祭り（五旬節）」「仮庵の祭り」の時には、神様の御前に出なければならないと定められてあります（出エジプト記 34：23、申命記 16：16）。しかし、新約聖書の時代には、最低、年に一回、「過越の祭り」の時には、成人した男性は「エルサレム」でこの祭りを祝うようにと言われていたようです。さらにこの頃には、女性も同行することが奨められていたようです。ですからヨセフとマリアは、毎年、年に一度はエルサレムに行き、過越の祭りを祝っていたのです。

しかし、イエス様が**「十二歳になられた」**その年は、ヨセフとマリアは、イエス様も連れてエルサレムに上って行ったのです。というのは、ユダヤ人は、十三歳になると、成人した男性と見なされ、律法を守る義務を負うようになるのです。そのためユダヤ人は、成人する前の十二歳の時に、親と一緒にエルサレムに上り、翌年からの義務に備えることが習慣であったようです。十二歳のイエス様も、翌年から自分の責任において律法を守らなければなりません。そのため、両親と一緒にエルサレムに上られたのです。

過越の祭りは、一週間行われました（出エジプト記 23：15）。ヨセフとマリアは、一週間エルサレムで過ごし、その後、「ナザレ」に向かって旅立ちました。ナザレとエルサレムは、距離にして約 100km あり、歩くと三日程かかるそうです。この過越の祭りへの

旅は、家族ごとにバラバラに行くのではなく、村ごとに村人と一緒に行ったようです。それは、盗賊などに襲われる危険から身を守るためだったようです。ですから、親族や近所の知人などと一緒に、三日間旅をするのです。その間、男性は男性でまとまり、女性は女性でまとまって旅をし、子どもは男性のグループでも女性のグループでも自由に行き来してよかったそうです。

ヨセフとマリアは、一日の道のりを進んだ時、つまり大体 30km ほど進んだ時、イエス様がどこにもいないことに気づくのです。おそらく一日の道のりを進むと、夜になって、家族ごとにどこかの宿に泊まるのでしょう。ヨセフは、イエス様がマリアと一緒に女性のグループにいるものだと思い込んで、マリアは、イエス様がヨセフと一緒に男性のグループにいるものだと思い込んで、一日の道のりを進んで来たけれど、いざ夜になって家族で集まってみると、イエス様がどこにもいないことに気づいたのです。親族や近所の知人に聞いても、イエス様は見つからないのです。どこを捜しても見つからないので、ヨセフとマリアは、また一日の道のり、つまり 30km の距離を歩いて、エルサレムに戻り、イエス様を捜し回るのです。エルサレムには、各地から過越の祭りのために、多くの人々が集まっていて非常に混雑していたでしょう。その中でイエス様を見つけ出すのは、大変なことでした。丸一日かけて、イエス様を捜し続けて、ようやくイエス様がいなくなってから三日後に、ヨセフとマリアは神殿の中でイエス様を見つけるのです。

2. 神の子であるイエス

では、イエス様は神殿の中で、何をしていたのでしょうか。イエス様は神殿の中で、**「教師たちの真ん中に座って、話を聞いたり質問したりしていた」**のです。しかも、「聞いていた人たちはみな」、イエス様の**「知恵と答えに驚いていた」**のです。イエス様は決して、律法の教師たちを教えていたわけではありません。「座る」という動作は、生徒が教師に教えを乞う時の姿勢です。イエス様は、教師たちを教えていたのではなく、教師たちの話を聞き、質問して、教師たちから学んでいたのです。イエス様は決して、生まれた時から完全な知恵があったわけではないと思います。40 節には、**「幼子は成長し、知恵に満ちてたくましくなり、神の恵みがその上にあった」**とあります。イエス様は、神様の恵みの中で成長し、知恵に満たされていったのです。52 節にも、こうあります。**「イエスは神と人とにいつくしまれ、知恵が増し加わり、背たけも伸びていった」**。この「増し加わり」「伸びていった」という言葉は、「前進する」「進歩する」という意味の言葉です。イエス様は、幼子から成人へと神様の恵みの中で成長していったのです。その中で、知恵も増し加わっていったのです。神の子であるイエス様は、両親のもとで育てられ、律法の教師から学びつつ、知恵を増し加え、成長していったのです。神の子である方が、人間のもとで育てられ、人間から学ばれるという測り知れない「ヘリ下り」が、ここにあるのだと思います。

マリアは、神殿の中でイエス様を見つけると、こう言います。**「どうしてこんなことをしたのですか。見なさい。お父さんも私も、心配してあなたを捜していたのです」**。すると、イエス様は、

こう答えられます。**「どうしてわたしを捜されたのですか。わたしが自分の父の家にいるのは当然であることを、ご存じなかったのですか」**。マリアの言葉は、普通の親なら理解できる言葉です。自分の息子が三日間もいなくなり、長い距離を歩き回って必死に捜したのですから、心配するのは当然です。しかしイエス様は、「どうしてわたしを捜すのか」「わたしが自分の父の家にいることがどうして分からなかったのか」と言われるのです。マリアは、「あなたのお父さんであるヨセフは、心配してあなたを捜していた」と言います。しかしイエス様は、「わたしは自分の父の家にいた」と言われるのです。つまりイエス様は、自分の父は神様だ、わたしは神様の子だ、だから神様の家である神殿にいるのだ、と言われるのです。ここに、マリアの思いとイエス様の思いのズレがあるのです。マリアは、イエス様のことを「わたしの子だ」と思っているのです。そして、「あなたの父はヨセフだ」と思っているのです。しかしイエス様は、「わたしは神様の子だ」「わたしの父は神様だ」と思っているのです。

イエス様はこの時、十二歳でした。やがて十三歳になり、成人した男性になる時でした。つまり、子どもから大人になる時期でした。その時にイエス様は、「自分は神様の子だ」「自分の父は神様だ」と言われるのです。大人になる、あるいは自立するとは、どういうことでしょうか。それは、「神様を自分の父としていくこと」だと思います。自分を生み、育ててくださった両親から離れて、「神様を自分の父として生きていくこと」、それが本当の意味で、大人になるということであり、自立するということだと思います。これまでは、両親の保護の下にあり、両親に従って生きて来たけれども、これからは神様の愛と守りと導きの下にあり、神様に従って生きていく、それが大人になるということであり、自立するということだと思います。

<u>おわりに</u>

ではイエス様は、「自分は神様の子であり、自分の父は神様だから、両親には従わない」と言われたでしょうか。そうではありません。51 節には、**「それからイエスは一緒に下って行き、ナザレに帰って両親に仕えられた」**とあります。イエス様は、自分は神様の子であり、自分の父は神様であるという明確な自覚を持っておられました。しかし、イエス様は三十歳になるまで、「ナザレ」の町で両親に仕えられたのです（ルカ３：23）。ここでの「仕えられた」という言葉は、「服従する」「従う」という意味の言葉です。イエス様はなぜ両親に従われたのでしょうか。それは、自分が神様の子であり、自分の父は神様だからだと思います。神様は、律法において**「あなたの父と母を敬え」（出エジプト記 20:12）**と言われます。自分の真の父である神様が、「両親を敬え」と言われるから、イエス様は両親に従われたのだと思います。決して、十二歳まで育ててくれた義理があるから、両親に従われたというのではないと思います。「両親に従う」ということが、神様の命令であるから従われたのだと思います。

私たちクリスチャンは、イエス様を信じ受け入れる時、「神様の子ども」とされます。

ヨハネ１：12 に、**「この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとなる特権をお与えになった」**とある通りです。その時から、私たちは神様を「父」と呼び、この方に従って生きるようになります。親に従うのでもなく、上司に従うのでもなく、夫に従うのでもなく、神様に従って生きるようになります。それが、神様の子どもであるクリスチャンの生き方です。この天地を造られ、私たち人間を造られた唯一の生ける真の神様を第一に従うべき方として生きていくこと、私たちのために十字架で命を捧げ、私たちのすべての罪を身代わりに償ってくださったイエス様を第一に従うべき方として生きていくこと、それこそ神様の子どもであるクリスチャンの生き方です。私たちは、義理や人情で親や上司や夫に従うのではありません。イエス様が親に従いなさい、上司に従いなさい、夫に従いなさいと言われるから、従うのです。私たちは決して、優先順位を間違えてはなりません。私たちがまず第一に従うべき方は、神様であり、イエス様です。この優先順位をはっきりさせないと、私たちのあらゆる人間関係は、支配と依存の関係に陥ってしまいます。私たちが、支配と依存の関係から自由になるためには、神様を父とし、神様の子どもとして生きていくことだと思います。

私たちは、年を重ねて、年齢的には大人になっても、自立できていないということはいくらでも起こります。経済的には自立できていても、精神的には自立できていないということはいくらでも起こります。大人になっても、支配と依存の関係を繰り返している人は沢山います。私たちが本当の意味で大人になり、本当の意味で自立するとは、どういうことでしょうか。それは、使徒ペテロが言ったように、**「人に従うより、神に従うべきです」（使徒 5:29）**という生き方をすることだと思います。神様を自分の父とし、神様の子どもとして、神様を第一として生きていくこと、その上であらゆる人間関係を築いていくことです。神様を、自分の従うべき第一の方とした上で、親との関係、子どもとの関係、上司との関係、部下との関係、夫との関係、妻との関係を築いていくこと、それこそ、支配と依存の関係を断ち切り、一人の大人として、自立して生きていく唯一の生き方なのだと思います。

天におられる私たちの父なる神様。

あなたは、ただ恵みによって、イエス様の十字架の償いによって、私たちを子どもとして受け入れてくださいました。本来、あなたに造られた被造物に過ぎない者が、神の子どもとされることなど、あり得ないことです。私たち人間は、アダムとエバが禁断の木の実を食べた時から、支配と依存の関係を繰り返し、家庭の中でも社会の中でも、あらゆる人間関係の中で互いに傷つけ合って生きてきました。どうかこの支配と依存の連鎖を断ち切り、あなたを父として、あなたの子どもとして生きていくことができますように。あなたこそ、私たちが従うべき第一の方として生き、誰かに依存したり、誰かに支配されたりする生き方に別れを告げることができますように。

私たちの救い主であり、真の王であるイエス様の御名によって祈ります。アーメン。